# 和歌山

地域面3ページ

和歌山支局
〒640-8154 和歌山市六番丁5
和歌山第一生命ビル4階
TEL073(431)1411
FAX073(433)0650
wakayama@mainichi.co.jp

【通信機関】
橋本 0736(32)0063 新宮 0735(28)1751
海南 073(482)0675 御坊 0738(22)2511
湯浅 0737(62)2870 田辺 0739(26)1026
【広告問い合わせ】 073(423)9291
【購読問い合わせ】 0120-468012

★の★る★集★と 星の占い マーク・矢崎 26日

# 春一番、男の祭だ！お灯まつり

絵と文・熱田親憙 題字・熱田秦華

## 熊野古道 みちくさ記 13

神倉神社と新宮市街

## 古の心 父から子へ 1400年

2月6日、新宮市の熊野速玉大社の摂社、神倉神社で約1400年前から続く「お灯まつり」が今年も執り行われた。フィナーレは夜だが、当日正午から参加者「上り子」の褌(ふんどし)の儀式が王子ケ浜で行われた。儀式は終わり、真っ白なフンドシ姿の男達が老若入り混じってたき火を囲む。和歌山市から参加された松本裕司さんは「誰でも参加できるのがいいね、僕は15年続けていますよ。上り子になると、ワイルドな心が湧いてくるね」とキッパリ。男ごころをのヒノキを使い、正目を大切にフサ(ハナ)を使っているのが特徴だ」と神事に携わる姿勢と気骨を示された。

午後4時を過ぎると白装束の男性が多くなり、町が動き出した。浜でお会いした松本さんと再会。腹ごしらえの現場に立ち会うことになった。食卓に準備されたものは、白米のご飯、豆腐、しろたくあん、しろ醤油など、取り戻す機会とみた。観光客も多く、東京からの十年来通うファンもおられた。

祭り全体を支える神倉神社奉賛会の猪飼三雄さんの紹介で、55年間たいまつ作りで祭りを支えてきた上道益大さんを訪ねた。ちょうど作業中だったが、県の名匠に選ばれた紹介記事とアルバムを見せていただいた。「大工、建具の技ですね」と尋ねると「うちは熊野産白一色。古人は子孫に分かりやすい形で褌のこころを伝えていた。

国道沿いに出ると、店頭に上り子が白装束に巻く荒縄をたくさんそろえている「やまぐち青果店」が目に留まり、店内で休ませていただいた。そこに、白衣を抱えたおばあちゃんが父子連れで入ってきた。「里帰りしている愛知県の孫も、上り子になるので、2セット、それに私の分の参代もちょうだい」。参代とは上り子が残り火を家に持ち帰るたいまつのこと。上り子は家の代表なのだ。店の主人は、白装束になった父親を椅子に座らせ、手際よく片方の縄を肩にかけて5回巻き、片方の端で輪を作って両端を強く引く。両端をそろえてカットして男結びが完結、防火の鎧としてもいい仕上がりだ。

また福祉会館では、集まった地元の上り子たちが変わったお太鼓結びに締められ、飛鳥時代の若者に変身していた。

夕闇迫る午後6時過ぎ、山伏を先頭に大たいまつを運ぶ一行やたいまつを打ち合う上り子が神倉神社に向かった。神倉山が見える町の空き地や沿道は、地元の人たちで埋まり、緊張が高まった。午後8時、闇の神倉山の中腹が急に明るくなり、一瞬静寂が走った。上り子と市民の心が一つになった。あっ！たいまつが動きだした。やがてたいまつの列は下に伸び、ワッショイの掛け声と共に下り龍のようにくねった。あっという間のお灯ショーだった。

顧みると、当日の新宮は、お店や市民総出でお灯まつり一色だった。2055人の上り子の男性が全国から集まり、伝統的な神事を通して祈った一日だった。開かれた町おこしである。新宮駅前のたいまつ担ぐ父子像と童謡「鳩ぽっぽ」を作詞した東くめの顕彰碑が、多くの人材を輩出した世界遺産のまち、新宮を象徴していると思った。

荒縄の男結びに春まつり

秦華

（次回は3月26日に掲載します）